

光の効果による劇の表現方法 — 影絵劇とブラックライトシアター —

Expression Method of Drama by the Effect of Light

— Shadow Theater and Black Light Theater —

平 中 学*

Manabu HIRANAKA

要 約

総合表現の授業において様々な劇やミュージカルを学生が主体的に企画、制作し、保育科発表会(平成27年度から短期大学部発表会)において毎回発表してきた。筆者は、総合表現のとくに造形部門の担当者として、劇の大道具制作や影絵劇、ブラックライトシアターの企画や制作などについて提案し、学生とともに実践してきた。様々な実践によって技術的に得られたことも多く、また学生の人間的な成長にも繋がっていると考えられる。そして今後はよりアクティブラーニングとして実践していく必要性を感じている。

キーワード:

影絵劇・ブラックライトシアター・ペープサート・光の3原色・蛍光塗料

I. はじめに

本学保育科では、10年前より年度末に瑞浪市総合文化センターにおいて卒業発表会を行い、ゼミや総合表現の授業の学習成果をステージで発表してきた。また、附属中京幼稚園においても「お楽しみ会」として、様々な劇や踊りなどを子ども達の前で実践してきた。筆者は、総合表現の造形部門を担当し、舞台の大道具をはじめ様々な劇の提案を行い、光の効果を取り入れた影絵劇やブラックライトシアターを学生とともに制作、上演してきた。本稿では、影絵劇とブラックライトシアターについての実践報告と今後の展開を考察していきたい。

II. 影絵劇

影絵劇は、古くから東洋の各地で行われ、世界に広まったものである。各地の影絵劇は、民族の文化として継承されており、ジャワ島の影絵芝居やトルコのカラギョーズと呼ばれる影絵芝居、中

国やタイなど世界各国で伝統的な影絵劇が営まれている。

影絵劇の魅力は、暗闇の中で光によって様々な影を映し出し、劇や芝居を演じることによって観る者に神秘的、幻想的な印象を与え、より物語の面白さや美しさを感じさせるところにある。また影絵人形は、牛皮や羊皮などで精巧につくられ、それぞれの地で独特の発展を遂げ、人形自体の素晴らしさも魅力的である。

1. 影絵劇の技法

影絵劇を行う場合に必要なものとして、基本的に光源と影をつくるための人形、そして影を映し出すスクリーンである。観客は、スクリーンに映った影を鑑賞し、演者はスクリーンの反対側で人形を操り、その後方から光を当てることになる。

影絵人形は、基本的に人物や動物など登場するもののシルエットを切り抜き、操る棒を取り付けるペープサートのようなものである。素材は、伝統的な皮の影絵人形は別として、どんなものでも可能で、身近な厚紙や段ボール、ベニヤ板など身

*本学教授

近な素材で制作することができる。影の大きさについては、人形の大きさが最小の影になり、人形をスクリーンから離すほどに大きな影を映すことができる。だから一つの人形によっていろいろな大きさの影を表現できることも長所である。

次に光源についてであるが、単色光を使用した場合は普通に黒い影になる。人形にカラーセロハンや透過性のある絵具で彩色をすれば色を表現することは可能である。ところが、舞台の照明に使用される赤・緑・青の3つの光を使った場合だと、赤の光の影は青緑、緑の光の影は赤紫、青の光の影は黄、赤と緑の光の影は青、赤と青の光の影は緑、緑と青の光の影は赤、赤緑青の全部の光の影になる部分は黒になる。このように複数の光源を使用することによって、様々な色の影と多数の影をつくり出すことも可能である。

影を映すスクリーンは、一般的に透過した影を観客が鑑賞することになるので、透過性のある素材が使われ、白い木綿地の布か白いビニール布、あるいはポリエステルのマットスクリーンを使う。簡単なものとしては、模造紙や障子紙でも可能である。そして会場の大きさや予算に応じて素材や大きさを考え、設置の容易さなども配慮する必要がある。

そして、影絵劇は、少人数でも2,30人の大人数でも行うことができることも魅力であるが、影絵劇に経験の乏しい学生が取り組む場合、光の効果イメージして、装備をつくることや演出を考えるのはなかなか難しいところがある。

2. 影絵劇の実践

1) 影絵遊び

影絵劇を制作するにあたって、まず影絵の面白さ美しさを体験する授業を行った。スクリーンは、木綿地の白布を角材に付け、天井から吊り下げた簡易なものを設置した。

まずは、OHPの白色光を用意し、数名の学生が様々な組ポーズをつくり、スクリーンに影を映し出した(写真1)。当然のことながら相前後する学生が、スクリーンという平面に一体となって映し出され、影絵の面白さを感じる事ができた。

つづいて、光の3原色のフィルムを取り付けた3つのライトを用意し、学生が様々なポーズをとり、スクリーンに影を映したところ、たくさんの影と黒の影をはじめ様々な色の影を映し出すことができ、影絵の面白さと美しさを実感することができた(写真2.3)。



写真1 白色光による影絵



写真2 光の3原色による影絵遊び 1



写真3 光の3原色による影絵遊び 2

2) 影絵劇「かいじゅうたちのいるところ」

平成25年度には、影絵劇で「かいじゅうたちのいるところ」を制作上演した。まず10月に中京幼稚園のお楽しみ会において、遊戯室の大きさに合わせてスチールパイプを組み合わせて白布を張り、スタンド式のスクリーンを設置して行った(写真4)。光源は、OHPの白色光と赤緑青の照明用フィルムを付けたライトを使用した。影絵人形は、学生自身が衣装やお面などを着けて演じた。

暗くなった遊戯室での影絵劇は、観客の子ども達の驚きや楽しさを直に感じながら演じることができた経験となった。

2月の保育科発表会では、同じく「かいじゅうたちのいるところ」を上演した。大きなホールでの発表であるため、スケールを大きくする必要からスクリーンは障子紙をセロハンテープで繋ぎ合わせて、8メートル四方の大きなものをつくり、舞台のバトンから吊るして設置した。ホールは広く、影絵も大きくする必要があるので、中京幼稚園で使った人形もそのまま使い、スクリーンから離れて演じることによって非常に大きな影絵をつくることもでき、また場面ごとの効果を考え、色光を用いて様々な色の影絵や複数の影も演出した。また、スクリーンを境にして前は現実の世界、後ろは幻想の世界として、「かいじゅうたちのいるところ」の面白さや不思議さの表現を試みることができた。(写真5.6.7)



写真4 「かいじゅうたちのいるところ」1



写真5 「かいじゅうたちのいるところ」2



写真6 「かいじゅうたちのいるところ」3



写真7 「かいじゅうたちのいるところ」4

Ⅲ. ブラックライトシアター

ブラックライトシアターは、影絵劇同様やはり暗い会場の中で、ブラックライトによって光り輝いて浮かび上がる人形が魅力である。一般的にブラックライトシアターは、パネルシアターを暗闇でブラックライトによって蛍光塗料で描かれたモチーフを輝かせて演じるものである。

1. ブラックライトシアターの活用

この実践では、ステージ上で蛍光塗料で描いた大きなペープサートや大道具などを用いて、ステージ前方に設置したブラックライトによって輝かせて、演じている。影絵劇のようにスクリーンに映すのではなく、人形自体がブラックライトによって光るので、装置も簡単で仕切りのない暗闇の空間において、演者は基本的に観客には見えない状態で自由に演じることができる。ただ大きさは影絵劇のように自由に変えることは不可能であるため、人形は実質的な大きさにする必要がある。

2. ブラックライトシアターの実践

1) 「アニマルファンジー」

平成 23 年度の保育科発表会において、初めてブラックライトによる劇を上演している（写真 8.9）。これは様々な動物のパーツを段ボールで青色の蛍光塗料のみで描いた大きなペープサートにつくり、それぞれのパーツを音楽に合わせて動

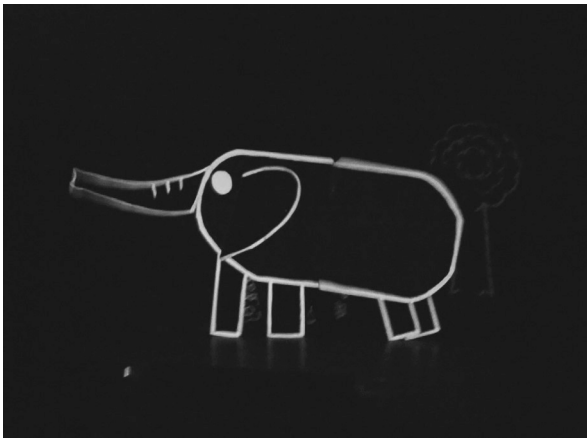


写真 8 「アニマルファンタジー」 1



写真 9 「アニマルファンタジー」 2

かしながら動物にしていくというもので、単純ではあったが、学生の思いを何とか形に表現することができた試みとなった。そして、暗い会場に浮かび上がる青白く光る映像の魅力が、観客の拍手や歓声によって感じることもできた。

2) 「ブレーメンの音楽隊」「スイミー」

平成 24 年度には、10 月に中京幼稚園において「ブレーメンの音楽隊」（写真 10）を、2 月の保育科発表会において「スイミー」（写真 11. 12. 13）をブラックライトシアターで行っている。双方とも蛍光塗料の色数を増やし、カラフルな表現をすることができた。特に「スイミー」はホールの大さに合わせて、数多くの大作の生き物や海藻などのペープサートを制作した。やはり、暗闇に浮かぶカラフルに光る海の生き物には効果的な表現であったこととスイミーのような小さな人形でも、暗闇という仕切りのない無限の空間で演じることができるという効果を感じることもできた。



写真 10 「ブレーメンの音楽隊」



写真 11 「スイミー」 1



写真12 「スイミー」2



写真15 「エリック・カールの世界」2

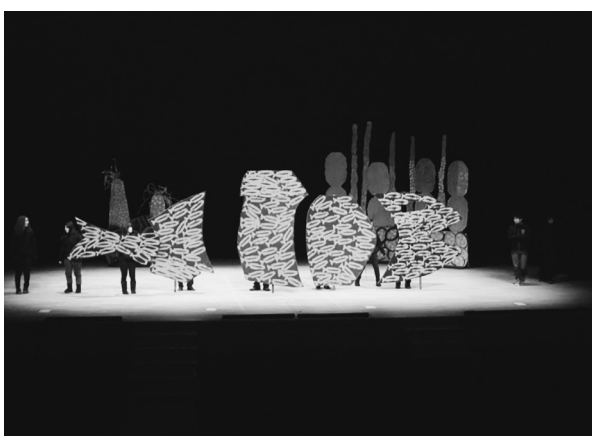


写真13 「スイミー」3



写真16 「エリック・カールの世界」3

3) 「エリック・カールの世界」

平成26年度には、「エリック・カールの世界」
として前半の「はらぺこあおむし」(写真14)
は、大型ペープサート、後半の「パパお月さま
とって!」(写真15.16.17)をブラックライトシ
アターによって行っている。ブラックライトに
よって輝く人形や大道具類は、カラフルなエリッ

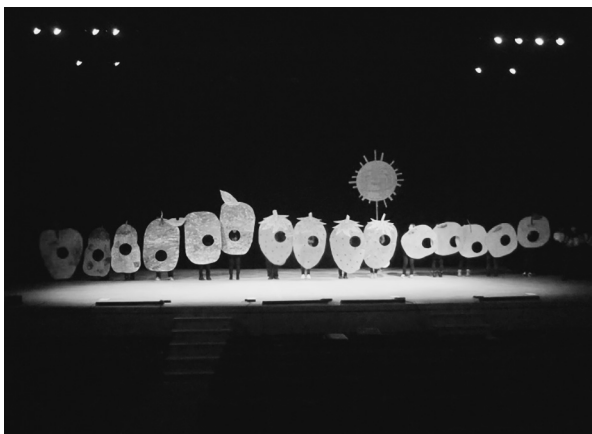


写真14 「エリック・カールの世界」1



写真17 「エリック・カールの世界」4

ク・カールの世界をより鮮やかなものに表現する
試みとなった。とくにお月さまと羽化した蝶は、
大作であるため試行錯誤をし、大きな紙と黒のビ
ニールを用いて制作したが、ビニールの方が軽く
素材として適していた。大きなホールでの発表と
なると、どうしても大きな装置をつくる必要があ
り、演出効果、強度や運搬そして予算など様々な

条件を考慮して制作する必要性を痛感した。

4) 「クレヨンのくろくん」

平成 27 年度には、7 月に中京幼稚園においてクイズ形式の影絵を行い、2 月の短期大学部発表会では、「クレヨンのくろくん」(写真 18. 19. 20)をブラックライトシアターを取り入れた大形のペープサートで行っている。クライマックスのシャーペンがスクラッチという技法で、真っ黒の画面を削り出して色鮮やかな花火を描いていく場面をブラックライトによって輝かせ、効果を出す試みをした。やはり花火の画面は、縦約 3 メートル、横約 10 メートルの大きなものであったが、前年の経験から黒のビニールの素材に色鮮やかな蛍光塗料を塗った障子紙を張り付けることによって制作した。出来た大画面を竹の棒に巻き付け、演じる時に順に開いていくという方法により、比較的容易に制作し、上演することができた。

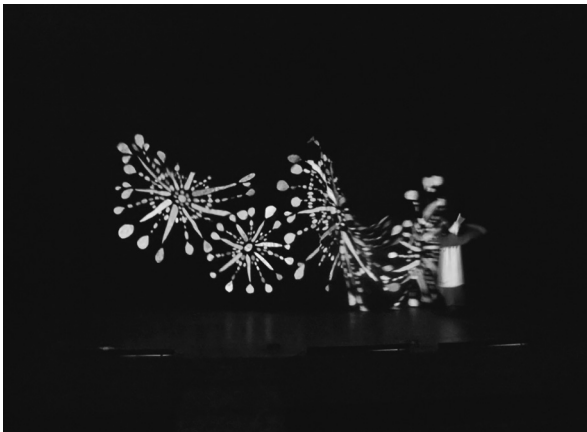


写真 18 「クレヨンのくろくん」 1

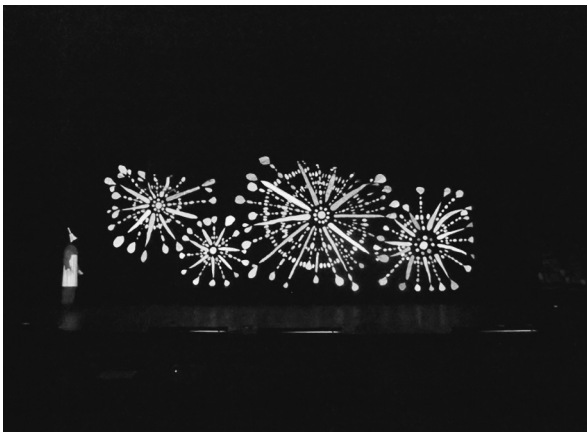


写真 19 「クレヨンのくろくん」 2



写真 20 「クレヨンのくろくん」 3

IV. おわりに

10 年にわたって行ってきた総合表現における劇制作について振り返ると、様々な方法を用いて劇の演出、効果を想定して試行錯誤を繰り返してきた。とくに影絵劇やブラックライトシアターにおいては、光の効果を想定して劇の演出や制作を学生とともにやり、その面白さと発表会で実践できた達成感も感じる事ができた。そしてこの授業、発表を通じて、学生の表現力はもちろん主体性、協調性、貫徹力など社会人として必要とされる多くの力も育まれたと考える。

課題としては、計画的になかなか進めることができなかつた点であり、どうしても間際になって学生共々発表に漕ぎ着けるといふ状況である。また大きなホールでの発表は、達成感も得られるが、学生共々そのための様々な負担は大きく、もっと気軽に楽しめる劇遊びというような形で発表ができる方法も検討する必要があると考える。

今後は、より魅力ある劇の表現方法の提案と学生が主体的、計画的に様々な劇遊びを展開できるよう支援していきたい。

【文献(参考文献)】

藤城清治：「藤城清治 影絵劇の世界」, 東京書籍, 1986. 11.30